

快樂亭ブラックと泉鏡花

——“The Adventures of Oliver Twist”の翻案をめぐる考察。

村松定孝

一、父なるジョン・レディの事

いきなり、このような題目を掲げて、本論に入ったのでは、ただ、いたずらに、読む人の視覚を、とまどわせるおそれ無きにしてもあらずと思うので、まず快樂亭ブラックとは、如何なる人物だったかを紹介し、併せて彼の作物の鏡花に与えた影響の意味について筆を進めてみることにしたい。

快樂亭ブラックとは申すまでもなく、日本に帰化した英国人の寄席の高座用の芸名である。本名はヘンリー・ジェームズ・ブラック。しかれば、彼が何故に家族と俱に日本に渡り、青い目の落語家として、明治大正の芸能界に、その名をとどめるに至ったか。いま、その経緯を、佐々木みよ子・森岡ハインツ両氏の共著『快樂亭ブラックのニッポン』（昭六一・一〇 P H P 研究所）及び赤羽絹子氏の『J・R・ブラック』（昭三二・一）「近代文学研究叢書」卷一所収・昭和女子大近代文学研究室）に拠って以下略述すると次の如きである。

ヘンリー・ジェームズ・ブラックは、一八五八年（安政五）十二月二十二日に、オーストラリアの北アデレード市にジョン・レディ・ブラックの長男として生まれている。では、父なるレディとは如何なる人だったか。

ブラック家は、そもそも英国スコットランド系の家系で、代々海軍士官の軍籍を継承した名門であった。ジョン・レディはスコットランドの生れ、幼少の頃、パブリック・スクールとして有名な、クライスツ・ホスピタルに学んだ。この学校は古い歴史を持ち、チャールズ・ラムなども在学している。家風に従い卒業後、海軍入りをする。が、一八五一年に英国領のオーストラリアに金鉱が発見されるや、海軍士官のポストを捨て、ゴールド・ラッシュの気運に乗じて同地に赴いた。しかし、黄金の夢はやぶれ、そのかわりに金鉱地のコンサート歌手として評判を得た。そのことは、その子のヘンリーが芸能人として身を立てる素質を父から受けついでいた証左とも言える。また、ヘンリー・ブラックは芸人であるばかりでなく、己の口演した人情噺を出版したりして、ジャーナリスティックにも活躍しており、そうした才覚も亦、親ゆずりの現われと考えられる。と云うのもジョン・レディ・ブラックは来日した一八六一年（文久元）から他界する一八八〇年（明治一三）迄の二十年（晩年の四年間は上海で過しているが）を新聞記者として、或いは新聞発行人としての生活をおくっているからである。わが国が文明開化と維新の变革に騒然としていた時期に当る。すなわち、彼が来日した年は、幕府が永い鎖国から開港にふみきった年（安政六）より二年後のことで、彼は妻と長男のヘンリーを英本国へ送り、単身、横浜外人居留地に姿を見せた。当時、既に英国からA・W・ハンサードと称するジャーナリストが日本に来て居た。ハンサードは自分の後任に、レディを英国の利益を代表する『ジャパン・ヘラルド』紙の編集長に当てた。その仕事を続けつつ、レディは、あらたに維新の動きを報道すべく、みずから『ジャパン・ガゼット』紙を発行する。それ

が慶応三年のことであるが、まもなく明治新政府が成立するや、近代日本の状況を世界に紹介するため明治三年、さらに月刊雑誌『ファー・イースト』を横浜で創刊した。

さて、ヘンリー・ブラックが母親に連れられ日本の土を踏んだのは父が横浜に上陸した日から数年後のことだったというから、おそらく慶応元年頃で、七、八歳だった勘定になる。若しも、ジョン・レデイが素直に英字新聞の発行だけに、とどまっていたら、失脚することもなく、妻子を日本に残して上海へ逃れることもなかったろう。さらにまた、ヘンリーが芸能界に職を求める運命を辿ることもならなかったかもしれない。

が、レデイは次のような事情から日本を去るのである。それはレデイが邦字新聞の発行への野心を抱いたことに始まる。当時のわが国の新聞（横浜毎日、開化新聞、東京日日、朝野新聞、郵便報知など既に創刊されていた）は、海外の新聞に比して、政治向けの論説欄が稀薄で、社会記事も野卑劣悪だったので、レデイは、これを是正する決意のもとに、日本語新聞「日新真事誌」を発刊すべく、政府の許可を懇請し、その実現をみた。発刊は明治五年四月二十三日のことであった。

されば、「日新真事誌」の影響力も大きく、「貌刺屈新聞」の異名で、ひと時は、知識階級の間日本人の経営する諸新聞を圧倒する人気を博した。政府はジョン・レデイ・ブラックに太政官会議録や政策記事を同紙に掲載する権限すら与えた。「日新真事誌」は、謂わば御用新聞的色彩を持っていたことになる。ところが、こうした政府の寛容さが、レデイを有頂点にさせる結果をも招くことになった。六年に起った御前会議に於ける征韓論争を暴露し、七年になると征韓派として参議を辞した板垣退助が副島種臣らと政府攻撃を目的に建議した民撰議院設立建白書の特ダネとして発表した。こうした記事に対して、政府はジョン・レデイの存在が次第に煩わしくな

ってきた。そこで、彼が「日新真事誌」から手を引くという条件で、明治八年に太政官顧問に任命した。月給六百円、他に家宅料として一ヶ月五十円を給した。右大臣岩倉具視と同額だったというから、破格の厚遇だった。が、同年、政府は新聞紙条例を發布し、政策批判を禁ずると俱に、外国人が日本の新聞編集に従事することを排斥する方針をとるに至り、そして、同年七月付で、彼の解雇が言い渡された。つまり、ジョン・レディの日本に於ける全盛は、わずか三年間に過ぎなかったわけである。政府は大学当局や政財界が外国人の知識を仰ぎつつ運営されていることを認めながら、外人の言説が民権政治・国会開設の要求を宣揚する引き金となることを恐れ、その犠牲にレディがなったと考えるのが妥当であろう。

ひとつには、レディは幕末に来日したことから、徳川慶喜びいきで、薩長政権というべき明治新政府に、その言説は、きびしく批判的だったことも禍したわけであった。

こうした日本政府の方針に憤ったレディは、明治九年、単身、日本を去り、上海に渡った。そして、その年、すぐに日本で発行していた月刊誌と同名の「ファー・イースト」と「シヤンハイ・マーキュリー」を発行する。これは英国及び欧州向けに上海並に清国の内政や経済事情を報道する目的の刊行物だった。が、天は彼に組せず、一八七九年（明治一二）六月、健康を害し、静養のため再び日本へ戻った。足かけ四年間にわたる中国での新聞人としての生活が、どの程度の成功を収めたものか否かは疑問である。しかし、彼が上海に妻子を呼びよせなかったのは、やがては日本を墳墓の地と定めたき存念が胸中にわだかまっていたためかと思われる。

レディは翌一八八〇年（明治一三）六月十一日の朝、横浜で心臓麻痺のため数奇なる生涯の幕を閉じた。享年五十三歳であった。彼は晩年を、『ヤング・ジャパン』の執筆に専念した。その内容はアーネスト・サトウの『近

『世史略』を基礎として、幕末から明治維新を経て、西南戦争の起る頃までの日本の情勢の変化を、自己の体験を生かし、つぶさに語ってゆく手法がとられている。また同時に、宣教師ブラウン博士の『コロキユアル・ジャパニーズ』を高く評価し、『ヘボン辞典』を称讃するなど、『ヤング・ジャパン』は、きわめて本格的な広範囲にわたる日本論と言えるものである。この著述は彼の没後、一八八一年にロンドンのトゥルブナー社、横浜のケリ社、さらに八三年にはニューヨークのベイカープラット社から出版をみており、海外で、おそらく当時、日本紹介の大きな役割を果したものと思惟される。

二、ブラック寄席芸人となる事

ジョン・レディについて、紙数を費して了ったが、いよいよ快樂亭ブラックのほうに船の舳みづなを向けることにしよう。

ヘンリー・ジェームズ・ブラックが慶応元年頃に、七、八歳で、母に伴われ、日本の土を踏んだことは前述したが、少年時代は父親のジャーナリストとしての全盛期と重なるので、多分めぐまれた日常生活を送ったに違いない。住宅は編集所を兼ねた芝増上寺内の源興院。此処は徳川時代には、洋学所と称したアメリカ人を中心にした溜り場で、維新後も明治政府がこの幕府の施設をそのまま利用していた。ところが明治九年に父が日本を去ったため、一家は、にわかに入収入の方途を失う。そこで、ブラック青年は自活の道を講じるため、手づま遣い（手品師）の柳川一蝶齋に入門し、寄席の舞台に立つこととなったのである。当時、十八歳。同年七月八日の「読売新聞」は一蝶齋が「ハール・ブラック氏を雇って、南茅場町と浅草鳥越の寄席で興行いたし、西洋手品は、いよいよ始

まります」と報道し、また同月十日の「東京曙新聞」は「英国において十八カ年の間修行して、同国人イワツク氏より手品の伝習を得て、昨年久々にて帰京」と宣伝しているが、『快樂亭ブラックの日本』の著者は、「十八カ年は信じがたい歲月」と記している。筆者もこれは新聞乃至は当人の誇張に依るものと考ええる。何故なら、幕府は安政五年にイギリスとの通商条約に調印したとはいえ、民間の海外修学並に貿易の許可を幕令として公布するのは慶応二年の四月である。さすれば、一蝶齋が渡英するのも、それ以後ということになれば、たかだか十年足らずの海外修業だったろう。それにしても、扇子から水をとばしたり、傘をひらくと花吹雪が舞う程度の日本手品に比べると、植木鉢に蒔いた種が即座に芽を出し、シルクハットから鳩が飛び上り、大理石の美人像が動き出すダイナミックな西洋手品に、観衆はさぞや眼を見はったことだろう。さらに、「欧州の手品は、みな学理に基づき、人智を開発せしむるに益あり」と新聞が西洋手品の科学性や教育性を喧伝したため、庶民は、もとより、知識人の間でも大いに歓迎され、やがて、松旭齋天一の登場となり、日本の奇術界は盛況を呈するに至る。ところで、ヘンリー・ブラックの手品師時代は十八歳から二十歳頃（明九一―一）までであるが、あまり評判にもならずじまだった。ブラック（以下、ヘンリー・ブラックをブラックとのみ記す）の名がクローズアップされるのは、彼と開化講談で売り出した松林伯円との提携が成ってからで、これは明治十二年以降のことに属する。ブラックが伯円に近づく前提として、明治十年に、父の友人であった退役海軍将校で雄弁家の堀竜太が彼を連れて、麴町有楽町の有楽館で催された公開演説会に出席した上、手品師の経験あるブラックに、その前座をつとめさせたことに、まず注目しておかねばなるまい。この催しは、堀が、沼間守一、高梨哲四郎、荒川高俊、土居光華などの同志を語らい、自由民権運動を鼓吹するために行ったもので、景気づけのため、松林伯円に余興として参加

して貰っていた。(沼間は、のちに東京府会議長、高梨は大隈重信の立憲改進黨に加入)ちなみに、伯円は「泥棒伯円」の異名があったほど、幕末から明治初期にかけての動乱期の盗賊をあっかった出し物を得意とした。歌舞伎界での河竹黙阿弥の『弁天小僧』や『三人吉三』などの白浪毒婦物と相呼応した観があったが、彼は次第に実録物に転じ、『桜田門外の変』、『西南戦地実況』、『大久保利通卿暗殺事件』など、ホットニュースを報道する形の口演で人気を得て、やがて、自由民権思想へ傾いて行った。

さて、ブラックは堀を通して、伯円と知合い、伯円は演説会でのブラックの才能に惚れ込んで、「ぜひ、わたしの一座に、参加してほしい」と依頼し、ついに明治十二年の一月に横浜馬車道の清竹という寄席の高座で、演説転じて人情講談の初舞台を踏むこととなった。

発足の時期のブラックの呼び物は『チャールズ一世』、『ジャンヌ・ダルク伝』であったという。なにしろ、目色毛色の変った外国人が流暢な日本語で、人情講談を聞かせるのだから東都の聴衆は大いに湧き立ったであろうことは容易に想像される。この年の六月に父のジョン・レディ・ブラックが上海から病氣静養のため、日本へ戻ったことは前述したが、レディは、息子が寄席芸人になっていたことを驚きもし、且つ喜んだそうであるが、翌年の一代目レディ没後、妹のエリザベス・ポーリンや弟の父と同名の二代目ジョン・レディ(兄が日本人石井アカの婿となり帰化したため)は兄が芸人になったことを嘆き、ブラックが芸能界で名声を得る存在になったあとも交際をたっている。エリザベスは福沢諭吉家の英語家庭教師、二代目レディは、いったん英国へ帰り、のちに来日して、神戸で貿易商として成功を収めた。

ブラックの当初の登録芸名は「英国人ブラック」だったが、それから十三年後、「快樂亭ブラック」と称するに

至ったことを明治二十四年三月二十四日の「やまと新聞」がたたえている。しかし、芸能界では、ずっと「英国人ブラック」の名で親しまれていたようである。永井荷風が若き日を回想した随筆『仮寝の夢』（昭和二一・七「新生」）の中で、「むかし市中の寄席に英人ブラックの講談が毎夜聴衆をよろこばしたことがあった」と述べており、明治十二年生まれの荷風が外語の清語科に入学後、落語家朝寝坊むらくの弟子になり席亭に出入りするようになるのが明治三十二年だから、三十年代にも、なお、快樂亭ブラックは英人ブラックで通っていて、わざわざ快樂亭と名ざしで呼ぶ人は少なかったに違いない。それは、ともかくとして、彼が外国の小説を翻案して高座に乗せたのは、十九年が最初で、これは英国の女流大衆作家の Mary Elizabeth Braddon（一八三七～一九一五）『Flower and Weed』を『草葉の露』と題し口演したものであった。この噺は速記され、同年、金港堂から出版された。それ以後、『英国奇談・流の暁』、『剣の刃渡』などを口演の上、いずれも「やまと新聞」に発表されるが、ここでは明治二十七年五月二十八日、同六月二十一日、同七月二十三日の三回にわたって同紙の付録に載った Charles Dickens（一八一七～七〇）の『The Adventures of Oliver Twist』の翻案『英国実話・孤児』を、とり挙げ、それが泉鏡花の諸作に影響のかげをおとしている点について、以下、考察をこころみることとしたい。

三、原作を如何に改めたかの事

そこで、『孤児』では、原作をブラックが、どんな工合に脚色し、日本人ごのみに変えているかを具体的に吟味し、それゆえにこそ、『孤児』が鏡花の胸の琴線に触れたであろう経緯を述べようとするものである。が、まずは事の順序として、原作の『オリヴァー・トウィスト』の梗概から始める。

養育院で生立った孤児オリヴァーは、お・か・ゆのお代りを望んだため、追い出され、葬儀屋の徒弟になるも、こゝでも虐待されるので逃げ出して、ロンドンへ向う。その途中で、盗賊フェーギン一家の少年掏摸すりの仲間にひき込まれ、掏摸になる訓練を受ける。相棒の少年の罪を着せられ、裁判にかけられるが、親切な老紳士ブラウンロ―氏の好意によって、その家に引き取られる。しかし、外出先で、再びフェーギンの一味につかまり、メーリー夫人の家へ泥棒に入る手伝いをさせられる。メーリー夫人の召使に追跡され、オリヴァーは負傷して捕えられ、メーリー家の看護で、快復する。一方、フェーギン一味はオリヴァーを取り返そうとたくらみしも、フェーギンの仲間のサイクスの情婦ナンシーが、この計画をメーリー家に密告したため、オリヴァーは難を脱した。サイクスは怒ってナンシーを虐殺するが、当人も逃亡中に誤って死ぬ。フェーギンもつかまって絞首刑となる。オリヴァーはメーリー夫人の姪ローズの甥であることがわかり、ブラウン氏の養子になって、ここで物語は、めでたしめでたしで終る。宮崎孝一氏は「オリヴァー・トウイスト」(昭三五・二)『世界名著大事典』第一巻・平凡社)の中で、同作を評して、「強引な偶然を導入することで、作者は無理に一篇をまとめようとしている。こういう手法は十八世紀に栄えた悪漢小説Picaresque novelの伝統のなごりである」と述べ、さらに本作の特徴として、「養育院の無情な経営法や裁判官の無知野蛮な態度への痛烈な攻撃と批判が含まれていて、そういう点が読者の共鳴を得たこと」を指摘している。この小説は一八三七年の一月から八年の三月にかけ、月刊雑誌「ベントリーズ・ミセレニー」に連載され好評を博し、オリヴァーが養育院で叫んだ「お・か・ゆをもう一杯下さい」(Please, Sir, I want some more.) という文句が当時ひろく流行したほどであったという。本作は作者のディケンズも気に入っていたとみえ、晩年に行なった公開朗読の有力なパートナーの一つだったようである。なお、本作の最も信

頼のおけるテキストは、オクスフォード大学の“The New Oxford Illustrated Dickens”といわれる。

さて、この原作をブラックは『孤児』で、どのように脚色しているであろうか。

.....

デイケنزの原作では英国社会の批判が加えられているため、地名や養育院の名称を、ぼやかしているが、ブラックは『孤児』で、「倫敦府より六十里程離れて居りますリーズ街といふ所でございます」と記し、「頃は只今から廿年前のことでありまして……」と、本当は原作が書かれてから五十五年を経ているのに、時間を短縮して、実話的效果をねらっている。面白いのは、「爰に演じますのお話しは英国に実際ありましたことでございますが皆さんのお聞き取りよいよやうに姓名だけ仮に日本に改めます」と、ことわってから、オリヴァーを高橋清吉、老紳士ブラウンローを福田勇吉、盗賊フェーギンを藤五郎、その悪党の手下のサイクスが関田文六、情婦ナンシーをおみねといった工合におきかえ、葬儀屋の主人が堀甚兵衛（墓掘をもじったものか）、その女房がお初で、雇人の小僧が平作、女中がお鍋、巾着切りの少年がチビ吉である。なお、原作ではオリヴァーが養育院で、おかゆを「もう一杯」とねだったため追い出されたことになっているが、『孤児』では養育院々長の田中清右衛門が、清吉を葬儀屋に紹介するのに、「この子は大雪の晩に往来に行倒れの孕み女の子で、小児を出産して母親は息を引きとったが、その子は今では十四歳」と説明し、ぜひ使ってみてくれと頼むという段取がとられている。それが、のちに清吉は福田勇吉の家出した娘おはるの子で、勇吉の孫であることが判明する伏線にもなっている。また原作では、オリヴァーが泥棒に入る手伝いをさせられ侵入したメーリー家と老紳士ブラウンローとの間には血縁的關係は無いのに対して、『孤児』では勇吉の倅善吉（生糸商人）の屋敷に、清吉は、そうとは知らず、手先に使

われ、忍び込むように仕組まれている。以上のように、ブラックは日本の寄席の聴衆を愉しませるため、原作を分りやすく改作し、日本化している。が、どうしても矛盾をまぬがれない箇所が無くはない。たとえば清吉が葬儀屋で、まえからの雇われ人の、清吉をいじめる平吉と仲の良い女中のお鍋に憎まれ、水のように薄い味噌汁しかあてがわれないと記したあとで、清吉を不憫がる主人の甚兵衛が、そつと女房や使用人の目をぬすむようにして、清吉に肉やパンを与えたと述べたり、登場人物は椅子とベットの生活をしており、ロンドンのストランド街の光景も克明にえがかれるのであるが、かと思えば、「やまと新聞」の挿画では、清吉がお鍋や平作になぐられている場面において、印半纏や和服姿である。謂わば和洋折衷といったところ。当時の読者たちは、こうした矛盾をどのように、うけとめて鑑賞したものか知る由もないが、その辺は適当に勘案する術を心得ていたものと思われる。

四、『黒百合』『婦系圖』の事

それは、ともかくとして、鏡花と『孤児』^{みなしご}の出会いは、どのような時期だったかといえ、彼にとって、最も窮乏のどん底を低迷していた状態と言える。『孤児』が「やまと新聞」に載った明治二十七年の五月から七月にかけては、その年の一月に一家の大黒柱ともいうべき鋳職人の父を喪い（母は早くに他界）、祖母と幼弟を抱えて、明日の米塩にも、こと欠く日々であり、幾回か鏡花は自殺しかけたほどだった。同年五月九日付の、師の紅葉が金沢の鏡花宛の書簡で、絶望的になっている弟子を戒め、金三円を為替にしたことを報告し、救済の手をさしべている。

かかる状態の中で、『孤児』を読んだ（おそらく、町の図書館か、祖母の実家での借覧かと思われるが）のであったから、感慨一入であったに違いない。

この作品は、よほど鏡花の共感を呼んだものとみえ、翌二十八年七月の「北国新聞」に発表した『妙の宮』には青年士官の懐中時計をぬく女の掏摸を登場させている。これは盗賊文六の情婦おみねの連想かとも受けとれる。しかし、おみねは清吉を哀れんで、なんとかして、この世界から逃がしてやろうと心がけ、そのことを清吉に囁いてるところを仲間に聞かれ、亭主の文六に、なぶり殺しにされるといふ悲運の女性である。が、鏡花の発想は女賊のままに活躍させるという手法を選ぶことになる。

その現れが三十二年の六月から八月にかけて「読売新聞」に連載した『黒百合』だったと言えるだろう。この表題は『絵本太閤記』の越中の国立山たてやまの「黒百合滅佐々」の故事に依るものであるが、深山幽谷に咲く黒百合採りをめぐって波瀾に満ちたプロットが展開される。本篇の主人公千破矢滝太郎は浅草の貧乏長屋に母親の内職仕事で細々と育ったが、どことなく品のある少年だった。十一歳の秋に母は歿みまかる。臨終に際し、一通の遺書をしたため、「これを小学校の先生にお渡しして、もしも富山からだという使い人が尋ねて来たら、この手紙を見せて下さるようお願いするのだよ」と滝太郎に託した。ところが、孤児の滝太郎は諸所をふろつき、窃盗・万引・詐偽を重ねる白魚のお兼という女賊と親しくなり、掏摸の訓練を受け、夜は墓場で野宿などする生活をおくる。この滝太郎を富山からの使者が警察の協力で、やっとさがし当て、富山の子爵家に迎えられる。滝太郎は殿様が滝太郎の母に産ました子供だったわけで、これで若さまとして、おさまればよいのに、富山のお屋敷をしのび出ては、ひそかに掏摸をつづけ、うばった金品を郊外の洞窟の中に運んで、よろこんでいる。やがて、彼は白魚のお

兼とめぐり合い、お兼から「どうせやるならもつと大きな仕事をしなよ」と、励まされ、黒百合丸という冒険船をこしらえ、これにお兼と乗組んで、大洋の波濤を越え、世界的盗賊となるために船出するというのが一篇のあらましである。大鷲と格闘したり、大豪雨、大洪水に遭遇したり、虚構の限りを尽している。教養小説ビルトクンフクノロマンというより、むしろロマン・ピカレスクと呼ぶにふさわしく、わが国の近代文学の主流をなす写実小説とは次元を異にした反近代的なものには違いないが、馬琴以来の物語性の継承を可能にして伝奇ロマンの世界が本作によって確立されたと称してもよいであろう。しかし、同時代の批評は、あまり芳しくなく、明治三十五年の三月に春陽堂から単行本として出版されたとき、「帝国文学」の石川重治が「奇を衒う事甚しきも、万丈の気炎爰に時ならぬ火花を散らし、奇語百出、快愁錯々、筆硯時に飛動する概あり」と評したくらいで、わずかな反響にとどまった。なお、同年十月の「文芸界」に短篇ながら、鏡花は『親子そば三人客』の一篇を寄せ、刑事の縄を、まんまと逃れる盗賊を点出させている。

それでは、鏡花は、もう『黒百合』で掏摸の出てくる小説をうちどめにしたかというところ、さにあらずして明治四十年に至り、名作『婦系圖』で、再び掏摸の登場と相成るわけである。

.....

明治四十年の一月から四月にかけて「やまと新聞」に連載された『婦系圖』の主人公早瀬主税の前身が少年掏摸であることは、おそらく、この小説の題名を記憶するほどの人々の間では周知のことであろうと思う。直接、小説を読んだことがなくても、己の過去を語る早瀬の科白を新派劇の舞台や映画やテレビジョンの画面を通して、ご存じに違いない。では、鏡花は何故、独乙語学者の早瀬の前身を浅草田圃あぐらに峙はむくらを持つ隼はやぶさの力りきと名乗る少年

掏摸に仕立てたか。これについては、従来、友人の登張竹風の回想がある。

明治三十九年、ニーチェ事件で筆禍を買い、高師の教職から追放された竹風は、その年の十二月に「やまと新聞」に入社することになった。同紙は四十年の元旦から陣営を建て直し、主筆に笹川臨風の弟の潔を立て、紙上一面に海外の時事文を載せ、竹風は文芸批評と独乙の欄の担当だった。主筆から小説を誰に頼むかと相談をうけ、鏡花が佳いだろうということになった。「やまと新聞」に鏡花が執筆したのは、このときは初めてだった。「やまと新聞」は、それまでは三遊亭円朝の人情噺や新作講談の速記を載せることで評判を呼んでいただけに、この新聞の読者層に対しては、口当りのよい、ドラマチックな読物の書ける作家をスクープする必要があった。幸い、鏡花は三十一年二月の『辰巳巷談』（新小説）、三十二年の四月から五月にかけて大阪毎日に載せた『通夜物語』が新派の舞台上で上演されていたので、大衆の眼をあつめるのに充分であった。

ところで、竹風が当時、逗子に住む鏡花に依頼に訪れたのが、三十九年の十二月二十五日、鏡花は、発表までに、あと一週間しかないのに、あわてて、「何か、おもしろい材料があるといいんだが」と、逆に竹風に救いを求めた。竹風が咄嗟に、

「掏摸の話なら一つ有るにはあるが……」

と、つぶやくと、

「すり結構、好きだ、話して見て下さい」

この掏摸が大好きだという鏡花の趣味は、どこに起因しているか、そのことは、あとで考察することにして、そのとき、竹風が語った掏摸の話というのは次のようなものであった。

竹風の三高以来の友人に岩政憲三なる豪傑肌の人がいて、この人は長崎の税関長をしていたが、上京すること、かならず登張家に顔を出した。或る春の一日、午後の四時頃、竹風が高師の授業を終えて帰宅すると、岩政は部下を引きつれ、既に上り込んで酒宴の最中だった。毎度のことなので、竹風夫人も心得たもの、それは一向に驚くほどのことでは無かったが、末席に年の頃十五、六歳の少年がいて、人並みにお膳を頂戴して、恥しげに俯むいている。

「あれは誰だい？」と訊ねると、岩政は即座に、「掏摸さ」と悠然と答えた。——浅草の釣堀で俺のポケットを狙ったが、しくじり、引つつかんで大喝、赦してくれ、というのを、「赦すことはならん、暫くそこで待ちおれ」と厳命して、鯉を一疋釣りあげ、魚籠をつるさせ、本郷まで連れてきたのだという。

「いや、おもしろい、貴公ならでは、出来ない芸当、近来の傑作だ」と、盃を重ねるうち、岩政は懐から十円札二枚を取り出し、「これは、お使い賃だ、これからは、もっと上手にやれ」とひやかして、帰したというのである。（明治四十年の二十円は高額すぎる。竹風の記憶違いか）

鏡花は、すっかり気に入って、これを採用し、早瀬が文学博士酒井俊蔵に救われ、ひとかどの独乙学者に育てあげられるが、やがてお蔭という芸者と馴染んだため、仲をさかれ、お蔭は病死、早瀬も自殺するという筋をこしらえあげ、『婦系圖』が成立する。早瀬とお蔭が「先生の仰言ることだから仕方ない」と悲しく湯島境内での別れの場面は、あまりに有名だが、このゆくたては、鏡花が恩師の紅葉から実際に蒙った苛酷な仕うちを再現したものと、徳田秋聲や勝本清一郎は考察している。しかし、これは鏡花のフィクションで、現実のお蔭のモデルの神楽坂の芸者桃太郎・すずは、紅葉歿後、ちゃんと鏡花夫人の座についてるし、紅葉が二人を別れさせたのは、

桃太郎は未だ妓籍に在りながら、紅葉に無断で、鏡花と同棲したため、紅葉には桃太郎の借金をかえしてやるだけの余裕はなかったし、自分の弟子が身請けもせず、妻が座敷稼ぎをしていることが世間に知れば、世間の聞えも悪く、硯友社の恥辱と考えての涙をのんでの処置だった。真相は、こうなのを、鏡花は都合よく組みかえ、お蔭は借金をかえした上で、着のみきのまま、早瀬の家へ移り住んだことになっている。これでは、モデルの紅葉があまりに分が悪いのだが、鏡花に抗議を申し込むにも、紅葉は三十六年に三十六歳で、他界しているのだから死人に口なし。もしも紅葉が五十歳、六十歳迄生きのびていたら、永久に『婦系圖』は書かれなかったことになる。

それは、ともかくとして、鏡花が竹風から聴取した掏摸の話は、『婦系圖』後篇の末尾・五十四章で、早瀬が身の上を語る箇処に次のように活かされている。

「己が十二の小僧の時よ。朝露の林を分けて、峙を奥山へ出たと思ひねえ。其処の釣堀に、四人連、皆洋服で未だ酔の醒めねえ顔も見えて、帽子は被つても大童おわらわと云ふ体だ。吉原げえりが、朝ッぱら鯉を釣つて居るぢやねえか。天窓あたまから呑んでかかつて、中でも鮒らしい奴の黄金鎖きんの手を懸ける、と了った！腕を呻うむと握られたんだ。擱へて打ちでもする事か、片手で澄まし込んで釣るぢやねえか。釣つた奴を籠へ入れて、（小僧是を持って供をしる。）ッて、一晩睨まれた時は、生れて、はじめて縮んだのさ。ぶらりく、昼頃まで歩行いてさ。其から行つたのが真砂町の酒井先生の内だった。先生がお帰りになると、四ッ膳の並んだ末に、可愛い小僧が居るぢやねえか。（何だい、）と聞かれたので、法学士が大口開いて（掏摸だよ。）と言はれたので、弗ふつり留やめる氣に成つたぜ、犬畜生だけ、情には脆いのよ。法学士が、（さあ、使賃だ、祝儀だ、）と一円出して、（酒が飲めなきゃ飯を食って

最う帰れ、今度ツからもっと上手に攫やれよ。」と言はれて、畳に喰くついて泣いて居ると、（親がないんだわねえ）と、勿体ねえ、奥方の声がうるんだと思ひねえ。（晩の飯を内で食あって、翌日の飯を又内で食はないか、酒井の籠で飼かって遣やらう、隼はやぶさ。）と、それから親鳥の声を真似て、今でも囀なげる独逸語だ。」

この箇所は『孤児』で、清吉が福田の家にひきとられ、「旦那の処ところに何時までもく永々奉公をしたいと思ひます」と告げたのに対し勇吉の女房が「オウよくいふた。旦那の方で親切に言いって下さるからお前も左様思おもってよく辛抱しんぱうしなくちゃいけないよ。貴君大丈夫ですよ。一旦手を焦やしたものは火を怖おそれるといふことがあるから清吉は決して逃出ですやうなことはありませんよ。正ほんとう実に可愛あぢやありませんか、貴君善吉の小供の時の顔かほに似て居ゐますねえ」と情けをかけてくれる場面と雰ふん囲い気が似交にっていることに氣きづかせられる。

しかし『孤児』では清吉が更生するところで終はっているが、『婦系圖』では、いったん独ひとり乙おとこ学者がくしやとして身みを立たてながら最後に本性ほんしやうを現あらわし、世よの権威主義けんゐしやうぎに対し凄絶せきせつなる復讐ふしやう魔まと化くわすという設定ていせつには、ここにも『黒百合』同然どうぜん、鏡花きやうかの悪漢あくかん小説趣味せうせつしゆみの横溢よこあふがしのばれるのである。

五、「掏摸大好き」の所以の事

ところで、鏡花の生涯には三回の危機ききがあつたと考えられる。第一回は明治二十三年（十八歳）の秋に、紅葉の門下かどたらんとして上京じやうきやう、ただちに尾崎家おしざきけに向むかう勇氣ゆうきなく、彷徨ひたひたの一年を過すし、翌二十四年の十月に紅葉を訪たづね、浮浪者うらなうしやの如ごとき日々を送おくる時期じきである。この時期の体験たいけんは、のちに『孤児』に接あした際ときに身みにつまされる動機どうきの遠因えんゐんになつたかもしれない。第二回目は前述ぜんじゆしたように明治二十七年（二十二歳）一月、父ちちを喪なくい、その夏、

祖母と幼弟を祖母の実家に託して、上京する迄の半年間。第三回が三十六年（三十一歳）四月に、紅葉に呼びつけられ、すぐと別れることを命ぜられたことである。しかし、この危機は、その年の十月三十日に紅葉の逝去によって解消する。むしろ、この危機こそ『婦系圖』執筆の引き金になったのだから以て瞑すべきであろう。しかも、「掏摸大好き」と叫ぶ鏡花には『孤児』に触発された要素が作用していなかったろうかというのが、筆者の言いたかったことである。『婦系圖』で、酒井俊蔵をして、早瀬にむかい、「お前なんぞのは、たかだか駈出しのTASCHENDIEBだ」と罵倒させているのも鏡花自身の中に、掏摸への同情と親近感が介在していたものと諒察せざるをえないのである。